症例報告Ⅰ

心身条件反射療法協会

「半年間続いた耳管開閉症」―①症状と検査―

カイロプラクティック・コンディショニング・ルーム・K
菊地光雄B.C.Sc

耳管開閉症とは

「耳管開放症はジャーゴによって1867年に初めて報告された病気」（参1）であり、耳管は鼻咽腔と中耳腔をつないでいる管で、大気と中耳腔の圧調整を行っている耳管が開放されたままの状態になり症状が出る。

図1 耳管

エレベーターや飛行機に乗って耳が詰まってボーとしたり自分の声が大きく聞こえたりする症状で、この症状は「耳管」（図1）が開いたまま（図3）になってしまうが正常であれば唾を飲み込むと改善する。（図2）

図2 耳管が閉じている

機能解剖

耳管は嚥下をすることで開き（図3）、その他の時は中耳を不必要な圧から守るために閉じている。（図2）

耳管軟骨部の外側には口蓋帆張筋（図2・3A）が付着しており、嚥下や開口、発声により口蓋帆張筋が収縮し耳管が開放する。さらに耳管の下には口蓋帆挙筋（図2・3B）という筋肉も存在しており、口蓋帆張筋に準じて開放に関与し、耳管の開閉をコントロールしている。

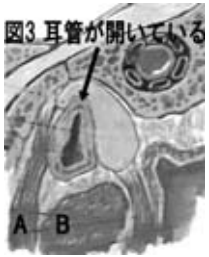

図3 耳管が開いている

症状

「耳閉感、自声強聴（自分の声が大きく聞こえる）、自分の呼吸音の聴取が典型的な症状であるが、ロビンソン（1989）は低音域の難聴、非回転性めまいが起こる事を報告しており、耳痛、音程のずれなどの症状も起こる。前屈や仰臥位でこれらの症状が軽快消失する事がある。」（参2）

女性に多く発症し、末梢循環の障害があり、気力や神経質などの精神面の障害がある。中には「自律神経失調症」といわれ精神科にまわされることもある。（参4）耳閉感は頭を下にしたり、お風呂に入ると一時的に良くなるが、激しい運動をしたりすると悪化したりすることもある。その他、立ちくらみ、睡眠障害がある。

原因

疲れや不眠の状態が続いたり、急激な体重の減少などで起こりやすくなるといわれといわれているが、明確な原因についてはいまだ分かってはいない。専門医ではストレスの関与や上気道炎、副鼻腔炎に伴う後鼻漏、アデノイド肥大や腫瘍による機械的圧迫などがいわれている。

病理的疾患か機能的疾患なのか鑑別診断は専門医との連係も必要になってくる。今回の症例の患者さんは既に専門医で「病理」の可能性は否定されているので、機能的疾患であれば改善する可能性はあることを説明し、同意を得て治療を行った。

〈患者Sさん〉

女性・事務職四十歳代

〈主訴〉

09年3月頃より、回りの音や人の声、自分の声が頭の中で大きく響くように聞こえるようになる。フワフワめまい。耳鳴り（左右の優位さは判断できない）

〈病歴、治療歴〉

過去に同様な症状はなし。専門医へ受診し検査の結果「耳菅開放症」と診断されるが原因は特定できなかった。飲み薬を処方され服用すると2，3日は軽減するような気がしたが大きな改善なし。

〈検査〉

心身条件反射療法（以下PCRT）による「神経反射検査」及び「言語神経反射検査」を使用し、ブレインマップ、経絡、五感を評価して検査をすすめていく。

検査結果

検査を進めて行くと大まかに「職場の人間関係」が大きな緊張パターンになっていた。

「職場の人間関係」の詳細な緊張パターンは以下の通り（陽性反応のみ記載する）

詳細検査結果

「職場の人間関係」を経絡、五感情報を特定し、さらに場所、時系列などから緊張パターンを生むイベントなどを詳細に探し出す。

経絡ブロック＝小腸経、胃経で陽性反応

五感情報＝聴覚情報、視覚情報で陽性反応

聴覚情報＝職場の人の声（上司、話の内容）で陽性反応

視覚情報＝同僚、電話の応対態度で陽性反応

場所・環境情報＝職場で陽性反応

時系列情報＝現在進行で陽性反応

神経反射及び言語神経反射反応によって小腸経と胃経、五感情報、聴覚情報、場所・環境情報、時系列情報の各陽性項目で緊張パターンの反応あり。

［参考資料］

（参1、2）
フリー百科事典ウィキペディア
（参3、4）
耳管開放症ホームページ
（図1、2、3、一部修正）
ネッター解剖学第2版

（次回は治療報告）